

言葉による統合イメージの創造 On creating integrated images by word

岩垣 守彦
Morihiro Iwagaki

フリー
Freelance

A work of literature depends largely on the creative writing techniques of the writer. So, if we want to create poetic expressions with computers, we have to learn how writers use words so as to provide emotional satisfaction. And so we must analyze the techniques logically to put them into the computer.

Writers have their own poetic techniques, but by surveying literary works, we can see that there is one basic technique common to all writers: they don't use words to express directly what they want to convey. They describe it indirectly so as to make readers accept it with emotional satisfaction. In other words, writers describe something to imply other things. Then, how do writers use words?

I'm going to analyze writer's poetic techniques and show you their ways of making integrated images by word.

1. 「類比照合力」と論理構造への展開

動物には二つの基本的能力がある。

一つは自分の死も含めて自然の変化に対する「予兆感知力」。もう一つは、生命を存続させるための「AはB(のよう)だ(A=B)」という「類比照合力」である。これがないと動物は生存していくことができない。たとえば、子猫に白い皿でミルクをなめる習慣を付ける。その子猫に、ミルクを入れないで皿を出すと、子猫はミルクがないと声を上げる。次に皿を出すと走り寄るが……。このとき子猫は「現在(の事態)＝直接画像(未知情報)」を「過去(の経験)＝想像画像(既知情報)」とつきあわせる。「ミルクの入っていない皿(直接画像＝未知情報)」と「ミルクの入っている皿(想像画像＝既知情報)」のつきあわせに使うのは「類比照合力」である。そして「皿にミルクが入っていない」と知ると子猫は満たすことを求めて「不満の声」(cry)を出す。これが情報交換の出発点である。次に皿が出されると、子猫は「ミルクの入っていない皿の想像画像」と「ミルクの入っている皿の想像画像」を同時に思い描いて「(皿にはミルクが入っているか、と)疑問」を抱く。これが「予測力」の始まりである。

このように、「類比照合力」は、一次的動因に関わる経験を通して、単に「過去(既知情報)と現在(未知情報)をつなぐ認知力」になるだけでなく、「過去の情報・現在の情報と未来の情報をつなぐ予測力」ともなる。これらの「認知力・予測力・情報発信力」は一次的動因(快・不

快)による「不満(現状の否定)・懸念(未来への疑問)・安心(現状の肯定)」に基づいて生じるので、当然、人間にも備わっている。

キリスト教の聖書にあるように、知恵の実を食べて自意識に目覚め、人間は「予兆感知力」をほとんど失ったが、その代わりに「類比照合力」(A=(like)B)を発展させて

「AはB(のよう)であり、BはC(のよう)である。したがって、AはC(のよう)である」

(A=B, and B=C, therefore A=C)

「AはB(のよう)であり、BはC(のよう)であるなら、AはC(のよう)である」

(If A=B, and B=C, then A=C.)

のように、「論理的推論」を身につける。つまり、「AはBである」ということは、「Aについて真であることはBについても真であることを意味する」と考えるようになる。そして、人間は「類比照合力」と「論理的推論」を

「既知情報 A (→類比照合→) = 既知情報 B」 → A=B

「既知情報 B (→類比照合→) = 既知情報 C」 → B=C

↓

「既知情報 A = 既知情報 C」 (=新情報) → A=C

のように、意識的に使って、人・物・事を認知し知恵や知識を増やしてきた。

このように、人間は「予兆感知力」を失った分だけ、「生得的な類比照合力を論理的に展開する」ということ、

「意識して推論する=類比対象を自由に選択して類比照合する」ということができるようになったのである。

2. 「類比照合する力」の聴覚符牒への展開

人間はこの「生得的無意識の類比照合」を「(体系化された)聴覚符牒(言語)を操る時にも使う。たとえば、「視覚刺激サクラ」(直接画像)を見て脳内に「想像画像さくら」を描き、内的資源の「既知画像さくら」と類比照合させて「サクラ」と認識する。このメカニズムは聴覚符牒・視覚符牒による情報の伝達でも同じでように働く。発信者が「聴覚符牒サクラ」という情報を発信すると、受信者は脳内の内的資源の「既知画像サクラ」と類比照合させて「想像画像さくら」を思い描いて聴覚情報を理解する。

このように、人間は「推論力」と「思考力」によって、恣意的に付与した聴覚符牒・視覚符牒を自由に選択して

「類比照合」

「X(と)は何か?」「XはYである。」

What = X? X = (like) Y.

「推論」

「XはY(のよう)である。YはZ(のよう)である。したがって、XはZ(のよう)である」

(X = (like) Y. Y = (like) Z. (Therefore) X = (like) Z.

「XはY(のよう)であり、YはZ(のよう)であるなら、XはZ(のよう)である」

If X = (like) Y, and Y = (like) Z, then X = (like) Z.)

のように、論理展開して使った。符牒体系によって符牒配列(syntax)は異なるが、どの符牒体系(言語)でも要素は共通である。たとえば、日本語と英語の場合を示すと、

主部=述部(xの点で、主部 =述部 であるから)

S(subject)x = P(redicate)x, (, because Sx = Px in x).

↓

A x は (xの点で) B x (のよう) である

Ax + V (e.g. is) + (like) Bx + (in x)

Ax は (Bxのよう)にする。[(xの点で) Ax は Bx だからである]

Ax + V (e.g. do) + (like Bx [=Ax + (in x)])

という形を基本として情報の交換をしてきた。

3. 「符牒による想像画像喚起の技巧」

人間は「無意識的推論力」(既知識 A=B, 既知識 B=C, よって新知識 A=Cを生み出す力)の他に「意識的推論力(思考力)」(個々に存在するX, Y, Zから新しい類比を導き出す力)を自由に使って「聴覚符牒(情報)による発信・受信をする。その際に介在するのは符牒に付随し、符牒によって喚起される「想像画像」である。その場合、視覚的に認識できる「有形のもの」は「集合イメージ」で「類比照合」して「想像画像」を創って理解することができる。では、「無形・非形のもの・こと」はどのように伝えるか。子猫が「ミルクがないという不満」を声(cry)で伝えるように、人間も声を出す。昔から「姿・形のないもの・こと」は「姿・形のあるもの」に変えて伝えるということ。詩人はそれをいくらか技巧的に使う。集合イメージ的に共通な「姿・形のあるもの」を自由に「選択(choice)」して、受信者に「画像創造(creating new image)」させて伝える。たとえば、イギリスの詩人 Christina Rossetti は目に見えない「風」を

Who has seen the wind?

Neither I nor you.

But when the leaves hang trembling,

The wind is passing through.

と詩って目に見せる。聴覚符牒が聞こえると受信者は意識することなく「集合イメージ」と「(生得的無意識的)類比照合」とで「想像画像」を創るのである。この仕組みを利用して、受信者に無形・非形の「情感」(emotion)を伝えるのが「符牒による想像画像喚起の技巧」(linguistic image-evoking artistry)である。たとえば、

白木蓮中年と云う男振り(石原 明)

において、受信者は

「白木蓮の集合イメージ」+「中年(男)の集合イメージ」+「(中年男の)男振りの集合イメージ」

のように、三つの「集合イメージ」を類比照合して、「統合想像画像(integrated image)」を創り、まだ寒さの残る冷たい春の空気の中で咲く硬質な白い木蓮の花の感触を硬派で厚みのある中年男のきりっとした佇まいと重ねて感じる。このような「集合イメージによる類比照合(analogical matching by set-images)」は「詩的技巧」(poetic artistry)として、「比喩(明喩 simile・暗喩 metaphor)」にもっとも生成・評価し易い形で現れる。

3.1 「無形・非形＝有形＋[共通属性・印象]」型＝比喩

比喩、特にメタファー、は根源的情感(集合イメージ)と共鳴させるような文学的な表現技巧の一つとして使われるが、比喩の原理は、すでに述べた論理的推論を

A (野菊) = B (楚々として美しい)
 B (楚々として美しい) = C (タミさん)
 C (タミさん) = A (野菊)
 ↓
 タミさんは野菊のような人だ

という形で、受信者の「集合イメージ」に訴えて「情感(emotion)を喚起させる技巧である。このように、比喩は共通の集合イメージを喚起させる属性・印象を含む符牒で分類した辞典があれば、新しい比喩的な表現を作り評価することは可能である。たとえば、「人生は旅である。」(Life is a journey.)が、受信者に比喩として認められるのは「人生(life)」と「旅(journey)」が共通の集合イメージを喚起させる属性や印象をもっているからであり、実際に Journey と life を調べてみると非常に多くの形容詞が重複する。

3.2 「無形・非形＋×有形＋×ガイド付き共通属性・印象」の型

シェイクスピアの有名なメタファー Life's but a walking shadow. (人生は歩く影に過ぎない) の前には Out, out, brief candle. (消えろ, 消えろ, 短い蠟燭よ) という台詞があって、Life と a walking shadow の関係は「短い, はかない」(brief)という点で類比関係にあるとガイドをつけている。集合イメージ的に共通な「姿・形のあるもの」を「選択(choice)」して「姿・形のないもの」を伝える際に発信者が「ガイド」を加えて受信者に「叫び(cry)」を伝えることがある。たとえば、「白鳥は悲しからずや湖の青空の青にも染まらずただよう」では「悲しからずや」が、また、「東海

の小島の磯の白砂にわれ泣き濡れて蟹とたわむる」では「われ泣き濡れて」がガイドである。

このように発信者が受信者にガイド(主観・判断)を加えることは俳句にも見られる。たとえば、

恋のない身にも嬉や更衣 (鬼貫)
 閑かさや岩にしみ入る蟬の声 (芭蕉)
 身にしむや亡妻の櫛を闇に踏 (蕪村)
 ふところに乳房ある憂さ梅雨長き (桂 信子)
 風が吹く仏来給ふけはひあり (虚子)

これらはすべて「無形・非形」と「有形」と「ガイド(主観・判断)」を組み合わせて「統合想像画像」を創り、受信者が情感(emotion)を喚起すること発信者は期待している。

3.3 「集合イメージ」・「集合イメージ」の型

17世紀イギリスの形而上詩人(metaphysical poets)の一人 John Donne は「しゃれこうべ」と「それに絡まる一筋の金髪」(A bracelet of bright hair about the bone)というイメージを組み合わせて、受信者に衝撃的な想像画像を創らせる。

これはぞっとするほど怪しくて艶めかしくて美しい。「怪しの集合イメージ」と「艶めかしの集合イメージ」と「美しの集合イメージ」が、一瞬にして渾然一体となり、受信者に「怪・艶・美の統合物語」を創らせる。ここでは「death(死)の集合イメージ」と「undying love(尽きない愛)の集合イメージ」が対比(contrast)されているが、これは「集合イメージ」を「対比」(contrast)して、受信者に自由に物語を創造させて、統合的に「情感(emotion)」を喚起させる技巧(linguistic image-evoking artistry)で、「無限の愛と有限の死」を組み合わせたたり、「騒々しい群衆と孤独」を対比させたり、「美のために醜」「静寂のために音」を組み合わせたたりする。閑かさに対比して蟬を鳴かせたり、静寂と対比して蛙を飛び込ませたりするのもこの技巧である

二つ以上の集合イメージを対比させて、受信者に「情感共鳴(emotional resonance)」を起こさせるというこの技巧は英語でも日本語でも使われるのであるが、英語は

S(subject)x = P(predicate)x, (, because Sx = Px in x).

という論理構造の束縛から逃れることができない。たとえ

ば、一昨年にノーベル文学賞をもらったスウェーデンの詩人トーマス・トランストロム(Tomas Tranströmer) は俳句に触発されて HAIKU 詩を創っているが、たとえば、

The sea is a wall. 海が壁。
I can hear the gulls screaming— 鷗の悲鳴—
They're waving at us. はよ逃げ、と

のように、「理屈(logic)」から逃れることはできない。

ところが、日本語は論理構造に基づく「符牒配列(syntax)」とは別に、「主題(topic)×事例(example)」(T×E) (×は「間(ま)」あるいは助辞の「や」という符牒構造を持っていて、超論理的に統合想像画像(trans-logical integrated images)を受信者に創らせることが可能である。その場合、「主題」と「事例」との間には論理的な納得は必要ではなく、集合イメージ的な納得があればよいので「主題×事例」「事例×主題」などと組み合わせは自由である。たとえば、「菜の花×月は東に日は西に」(蕪村)「古池×蛙飛び込む水の音」(芭蕉)、「母の手を振り切ってゆく×五月かな」(佐藤郁良)などのように。これらの句において「菜の花=月は東に日は西に」「古池=蛙飛び込む水の音」「母の手を振り切ってゆく=五月」という論理的類比関係は成り立たないが、ある主題に現実起こりうるある事象事例(情景)を組み合わせることによって、集合イメージを融合させるのである。

このような、「無形・非形を有形で受信者の集合イメージと共鳴させる才能」は、いわゆる「文才・詩才」と言われるものである。この文才・詩才のメカニズムは、「聴覚符牒(名詞および、名詞を含む事象)」の「分類(categorization)」と「選択(choice)」と「組み合わせ(combination)」から成り立っている。

重要なのは、受信者の心に潜んでいる「静寂の集合イメージ」を喚起させるために、対比的に「音(蛙の飛び込む音)」を強調するところである。この仕組み機械的に処理するにはどのようなフローチャートが必要であろうか。

参考文献

[石原 明(2012)] 『ハイド氏の庭』(句集) (2012/06/03 東京, 文学の森)

[岩垣守彦(2000)] 「「イメージの形成と言語発生」のモデル」から「文学のモデル」へ」大阪大学(2000) (日本認知

科学会テクニカルレポート(文学と認知・コンピュータ6))

[岩垣守彦(2006)] 「言葉とイメージと映像と想像力の問題」日本認知科学会ワークショップ, 中京大(06/08/04).

[岩垣守彦(2007)] 「発信される「表現」と受信について」ことば工学, 東京外大(070316).

[岩垣守彦(2007)] 「感覚刺激の観点から感情喚起の方法を探る」(第13回LCCII例会(近畿大))

[岩垣守彦(2007)] 「深層に沈んでいる感情を表層で波立たせる——intertextualityの原点的考察」(071214 ことば工学, 阪大)

[岩垣守彦(2006)] 「言葉とイメージと映像と想像力の問題」(日本認知科学会ワークショップ, 中京大(06/08/04))

[岩垣守彦(20089)] 「「読む」とは「創る」こと——「表現技巧」について」(ことば工学(神奈川大 2008/3/28))

[岩垣守彦(2008)] 「日本語における感情喚起の表現をデータ化する」(2008/06/14, 人工知能学会全国大会ワークショップ(ことば工学)(旭川))

[岩垣守彦(20089)] 「受け手の心に感情を喚起させる「言葉のデザイン」——俳句の場合」(2008/10/31, ことば工学, 武蔵野美大新宿キャンパス)

[岩垣守彦(2009)] 「古池に蛙が飛び込んだら俳句にならない——感覚情報を伝達するための技巧」(09/06/17, 人工知能学会ワークショップ(ことば工学)高松)

[尾形 侑(2000)] 『新編俳句の解釈と鑑賞事典』(2000 東京, 笠間書院)

[Riffaterre(2000), Michael: Semiotics of Poetry. Indiana University Press (齊藤兆史訳(2000)『詩の記号論』東京, 勁草書房)

[佐佐木幸綱(監修)(2004)] 『日本の名短歌100選』(2004/03/30 中経出版)

[佐藤郁良(2007)] 『海図』(句集) (2007/07/19, 東京, ふらんす堂)

[長谷川 權(2005)] 『古池に蛙は飛び込んだか』(花神社, 東京, 2005/06)

[Tranströmer, Tomas(2006)]: *the great enigma* translated from the Swedish by Robin Fulton (A New Directions Book, New York, 2006)